

聖書日課 『からし種』 2026.3.8-3.15

<p>3月8日 (日) 民数記 12章</p>	<p>「彼ら(ミリアムとアロン)は更に言った。『主はモーセを通してのみ語られるというのか。我々を通して語られるのではないか』(2節)。ミリアムとアロンは、弟モーセのみが神に重用されることに不平を抱いた。姉と兄の人間的感情としては分かる気もする。しかし神の選びは、人間の思いや感情を超える。そして、厳しくも聖書は神の前にひれ伏す信仰を求める。</p>
<p>9日 (月) 民数記 13章</p>	<p>「主はモーセに言われた。『…わたしがイスラエルの人々に与えようとしているカナン土地を偵察させなさい』(1-2節)。ガザに対する殺戮を見ると、カナン侵入の「正当性」を「神の御旨」として語る民数記に胸が痛む。主イエスはこの民数記をどう読まれたのだろう。自分を王として担ごうとする人々から離れて一人で山に退かれた主(ヨハネ6:15)の姿を想う。</p>
<p>10日 (火) 民数記 14章</p>	<p>「主はモーセに言われた。『この民は、いつまでわたしを侮めるのか。彼らの間で行ったすべてのしるしを無視し、いつまでわたしを信じないのか』(11節)。不信の民を慈しみ、数々のしるしをもって荒れ野の旅を導き続けた神の愛を想う。主イエスも人々の不信にどれほど落胆されたことだろう。しかし、だからこそ、十字架に向かわれた主の深い愛と祈りを想う。</p>
<p>11日 (水) 民数記 15章</p>	<p>「あなたたちは、わたしのすべての命令を思い起こして守り、あなたたちの神に属する聖なる者となりなさい(40節)。不信を重ね、神の心を痛め続けている私たちを、それでも「わたしの民」と呼ぶ神の真実の愛が先にある、その神に属する「聖なる者となれ」と語りかけられている。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい(ヨハネ15:12)。</p>

聖書日課 『からし種』 2026.3.8-3.15

<p>12日 (木)</p> <p>民数記 16章</p>	<p>「こう語り終えるやいなや、彼らの足もとの大地が裂けた」(3 1節)。荒れ野の旅の厳しさゆえに信仰を失い、モーセに反 抗する人々の姿を聖書は描く。同じ過ちを繰り返す「懲りない 面々」はそのまま私たちでもある。この世界で見えない神を信 じ抜き、荒野の旅を続けることは何と難しいことか。その私た ちを救うため、主は「契約の血」(マルコ 14:24)となられた。</p>
<p>13日 (金)</p> <p>民数記 17章</p>	<p>「彼らがモーセとアロンに逆らって集結し、臨在の幕屋の方 を向くと、見よ、雲がそれを覆い、主の栄光が現れていた」 (7節)。「またか！」というモーセの深い嘆きが聞こえてきそう だ。民数記は「民の反逆の記録」である。不信を裁く神の怒り の厳しさは、私たちも同様に厳しい怒りを受くべき者であるこ とを示す。その私たちが十字架において赦されているとは！</p>
<p>14日 (土)</p> <p>民数記 18章</p>	<p>「あなたとあなたの子らは、共に祭司職に関する罪責を負わ ねばならない」(1節)、「わたしは祭司職を賜物としてあなた たちに与える」(7節)。民の反逆を次々に描きながら、祭司職 は賜物であると共に罪責を負うことであると示される。このこと は、神と私たちの関係が愛と義の関係であることを示す。神の 愛を受け、神の義に仕える。そこに祭司の務めがある。</p>
<p>15日 (日)</p> <p>民数記 19章</p>	<p>「それらの汚(けが)れたもののためには、罪の清めのため に焼いた雌牛の灰の一部を取って容器に入れ、それに新鮮 な水を加える」(17節)。荒れ野でありにも近い「死」への恐 れを「汚(けが)れ」と呼び、特別なモノと儀式で恐れを克服す るしかなかった私たちの解放のため、主は「十字架をしのび、 死にて死に勝ち、生きて生命を人にぞたもう」(新生240)。</p>